

津島神社のむかし話

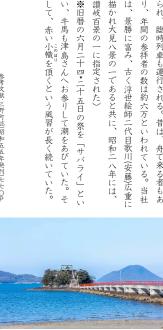
津島さん

りました。 流行病で牛馬が死んでも、 作り島の神としたところ、 の中から聞こえてきました。里人が行ってみても誰もおりません。巫女に託したところ して、旧の六月二十四・二十五日には津島神社へお参りの後、 「私は海中に住んでいる津島神なり。今からこの島に住み里の小児や牛馬を病から護るか」。 文禄二年(一五九三年)の六月から八月ごろ、この浦に女の人の謡うとても美しい声が海 木をたくさん植えて私をお祀りなさい」とご神託が告げられました。里人は、 久保谷では死なない。 久保谷では疫病もなく牛馬も死ななくなりました。 それから百姓たちは、 潮水で牛馬の体を洗って帰 小児や牛馬の神と 他の部落で 鳥居を

かして入りました。 潮あびをすませた牛には、島に生えているうばめが 潮水も樽に汲んで持って帰り、 必ず食べさせたということです。赤い幟と一緒 家族中で風呂を沸

描かれ大見ハ景の一であると共に、 とすることが多い。夏の祭典には、 としての信仰が厚く、 讃岐百景の一に指定された) り、年間の参拝者の数は約六万といわれている。当社 の松林に並び、花火大会があり大変にぎわう。当日 サバライの日は朝からとてもにぎわっていました。 (最近では、 景勝に富み、古く浮世絵師二代目歌川(安藤)広重に 参拝者のため国鉄の「津島ノ宮駅」が臨時に設け 臨時列車も運行される。昔は、舟で来る者もあ 牛馬の神としてよりも、子どもの守護神 愛児が生まれると参拝して氏子 多くの露店が境内 昭和二八年には、





して、

牛馬も津島さんへお参りして潮をあびていた。